京都秋期福音特別集会（1）

ガラテヤ書の精神

――ガラテヤ書第1～2章――

１９６５年10月29日（京都）
小池辰雄

キリストに由りて　キリストという恩恵体　異なる福音　実言は実現する　生命の御霊の法
キリストの顕示によった　十字架の罪の贖い　全身的なひっくり返り　御声と御霊は一つ　同
円異中心　真理のもつ極限性　十字架の下でお互いに赦し合う　天国の鍵　喜びをもって従う
キリストと共に十字架される霊的現実　自分の中に生きていらっしゃる活けるキリスト　キリ
ストは不死の霊、人を活かす霊　自分をキリストの中に棄てる　御言と現象

【ガラテヤ1】

1人よりに非ず、人に出るにも非ず、イエス・キリスト及び之を死人の中より甦えらせ給いし父なる神に出りて使徒となれるパウロ、……

6我は汝らが斯くも速かにキリストの恩恵をもて召し給いし者より離れて異なる福音に移りゆくを怪しむ。……

8されど我等にもせよ、天よりの御使にもせよ、我らのかつて宣べ伝えたる所に背きたる福音を汝らに宣べ伝うる者あらば詛わるべし。……

10我いま人に喜ばれんとするか、或は神に喜ばれんとするか、そもそもまた人を喜ばせんことを求むるか。もし我なお人を喜ばせおらば、キリストの僕にあらじ。……

12我は人より之を受けず、また教えられず、ただイエス・キリストの黙示に由れるなり。……

16御子をわが内に顕して其の福音を異邦人に宣べ伝えしむるを可しとし給える時、……

【ガラテヤ2】

……19我は神に生きんために、律法によりて律法に死にたり。20我れキリストと偕に十字架せられたり。最早われ生くるにあらず、キリスト我が内にありて生き給うなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり。……

●キリストに由りて

私たちは今日、「ガラテヤ書の精神」ということを、全6章を一時間や二時間でとてもこ

こで学びきれるものではありません。けれども、午前は1章から3章の重点をつかまえて、これを学びとりたいと思います。ガラテヤ書1章です。

1 **人よりに非(あら)ず、人に由(よ)るにも非ず、イエス・キリスト及び之(これ)を死人の中(うち)より甦(よみが)えらせ給(たま)いし父なる神に由りて使徒となれるパウロ、**

この宣言が他の書簡と違って、非常に特色をもっています。「人よりに非ず、人に由るのでもない」と。人から発したのではなく、また人を通してでもない、もう直接なんだというわけです。

お釈迦さんが57日の坐禅をして下山すると、ウバカという仙人にでっくわした。ウバカはお釈迦さんの姿を見て、

「あなたは心が非常に広くなった。身体も非常に豊かのように見える」

と言ったという。そしたら、お釈迦さんが言うのに、

「私は大悟した。無師独悟である」

と。「先生はない、独りで悟った」と答えたそうです。そして、

「一切の覚者となった」

と。「仏陀」というのはそういう意味だそうなんですが。お釈迦さんは即ち、師がなくて独りで悟った。瞑想の世界で悟りに入った。仏教の特色はそういった悟りです。煩悩解脱(ぼんのうげだつ)ということもひとつの悟りの境地になる。それは悪くはない。非常に大事なことでもあります。

けれども、この福音におきましては、パウロは、

「イエス・キリスト及び之を死人の中より甦えらせ給いし父なる神に由って」

と、相手が非常にはっきりしている。独りでもって悟ったのではない。

「人よりに非ず、人に由るにも非ず」

というのは、「私は独りで悟った」という意味ではない。これは「神によった」という。しかも、ただ「神によって」と神秘的に言っているのでもない。

「キリストを甦らせたところの――キリストが永生者、永遠の生命者であることを実証なさったところの――神さまによるのだ」

と。でありますので、その「神による」ということの内容は何かといったら、キリストのことに関してです。その神とはどういう神かというと、キリストにおいて、その恵み、力、生命を顕したところのその神による。

「何者にもよらないが、神により、キリストにより」

ということなんです。パウロは、

「自分はキリストの僕(しもべ)である」

ということをよく他の書簡でも言っている。ローマ書の始めの方にも出ています。

私たちが本当に「在る」という、「存在する」ということは、「我思う故に我在り」でもなく、「我悟れり、故に我在り」でもない。

「キリストが在す故に我在り」

ということ。その「キリストが在す」ということは、何か客体的に「ここにコップがある故に…」というようなことではない。「キリストが在る」ということは、これはだんだん、私たちはこのガラテヤ書を通して学んでいくわけです。

「キリストが在るが故に我がある」

ということは、その「キリストが在る」というのはどういう「在る」かということであります。

パウロは神・キリストの直接の啓示によりましたが、パウロの自覚がそれであったと同じように、私たち一人びとりも私たちは人から聴くけれども、しかし、ある時に決定的にキリストによる。そのことをもうひとつ具体的に言うと、キリストを証しているところの、証言しているところの聖書という――ある意味においては、福音集会は聖書集会と言ってもいい――

「聖書一巻によって」

と言ってもいいんです。ただし、「聖書一巻によって」ということがヘタすると儀文になりますから困りますけれども。

「儀文は殺し、霊は活かす」

とパウロが言ってますが、私が今「聖書」と言うときは、儀文としての聖書ではない。「キリストによる」ということです。この聖書による。私たちは聖書によって立つ。そういうことを私たちはこのガラテヤ書のパウロから学ぶ。今、ここにガラテヤ書そのものを私は註解するのでもなければ、また皆さんも、ガラテヤ書そのものをただ学ぶというわけでここに居るのではない。我々はいかにして再宗教改革を身につけるべきかという問題であります。

●キリストという恩恵体

そこで、６節、

６**我は汝らが斯くも速かにキリストの恩恵をもて召し給いし者より離れて異なる福音に移りゆくを怪しむ。**

パウロの「キリストの恩恵」という言葉も、どうか皆さん、我々は、

「キリストの恵みとは何だ」

といって、何か言葉をそこに並べあげるような考え方をしないように。キリスト自身が恵みの主体でありますから。キリストという恵みです。

私たちは、生命は具体的なものですから、具体的なものは具体的なものによらなければどうにもならない。肉体はやはり、ご飯をいただかなければ、食物をとらなければ、肉体はどうにもならん。魂の存在としての私たちも、ただ単なる心を喜ばせたり、満足させたり、

単なる頭の理解であるようなことでは、魂が生きるというようなことにはならない。どんなに聖書が分かりましても、分かる世界ではダメなんです。そういう意味において、「キリストの恵み」と言ったら、キリスト自体が恵みであると、直ちにそういうように受けとっていかなくては。キリストという恩恵体です。恩恵の存在、体（からだ）です。

「キリストの恩恵をもて召し給いし者より離れて異なる福音に行ってしまった」

と。パウロは、

「キリストという恩恵だけでたくさんだ。もうこれでたくさん。他に何も要らん」

と言う。

日曜で天気が良くて、外へ行けば、いろいろおもしろいことや楽しみがたくさんあるでしょう。けれども、私たちはこんな所に入って来ているが、しかし、この中に、外のいかなる楽しみよりももっと素晴らしい楽しみがある。いかなる喜びよりももっと素晴らしい喜びがあるから、やまれないから、私たちはここに集まっている。それが即ち

「キリストという恩恵」

なんです。これは他のどんなものとも代えることのできないものである。この福音は、別な言葉でいえば、

「キリストという福音」

です。キリストが宣べ伝えたところの喜びのおとずれも福音でしょうけれども、福音の福音たるものはキリスト自身が即ち喜びの音信（おとずれ）なんです。

「汝ら、福音せよ」

という、ギリシャ語の動詞でそういうような言葉があるくらいです。それを何か、このキリストの恵みだけでは足りないから、もう少し別なものが要るんだということを、いわゆる伝統的なユダヤ教の人たちが、ユダヤのモーセの律法プラスアルファの律法というやつを持ってきて、そこでもって一生懸命でやる。その点では、ユダヤ人というのは実に律法の民です。

今、イスラエルに行きましても、そのことを感ずる。ユダヤ教というものが、そういう意味においては、身についているんだ。もう律法の世界でね。金曜日の夕方は、日が沈むと煮炊きは絶対にしない。土曜日の日が沈むまで。これは安息日ですから。汽車も自動車もみんな止まってしまう。安息なんだから。仕方がないから、やみの自動車だけが少し動いている。私はそのことを知らなかったから、あちらへ旅していてそのことを聞いて、イスラエルに寄った時に途中で立ち往生になってしまうから、これは大変だというわけで、少し予定を変更して急いだりしたことがありましたけれども。その調子ですよね。

ユダヤ人はあいかわらず、律法の民であって、キリストを受けとらないわけです。パウロが本当はそうだった。ユダヤ的な律法の堅固さというものは、ユダヤ人が世界にいくら散らばっても民族としての結集を持っているのは、ひとつはこの律法の民だからです。旧

約聖書を経典としてガンとして動かない。それが彼らの力ではありましょうけれども。その力は一種の霊的なものです。けれども、それでは本当の和をもたらすところの、救いをもたらすところの力にはならない。だから、パウロがいつも、

「恩恵と平安と汝らにあらんことを」

と祈っている。それはパウロは「恩恵と平安」と反対の世界にいたものだから、律法と頑なの世界にいたものだからです。

●異なる福音

ところが、私たちのこの現実においても、福音といいながら、どうも「異なる福音」に、知らないまに行っている事態がだいぶあるわけです。非常に福音に対して熱心な人にむしろよくある。

「もっと自分は潔まらなくてはいかん」

というようなわけで、滝浴びをしたり、斎戒沐浴して魂を潔め鎮めて、聖書を読んだり。時には火渡りまでするようなこともあるようですが。あるいは、もっと聖書の勉強を――聞けば、そうは言わないけれども――ギリシャ語やヘブライ語で勉強すれば、聖書はもっと分かると思ってみたり。学問的な本を読める人の方が、聖書がより掴めると思ってみたり。みんな何かプラスアルファをやっている。条件を付けている。

パウロはそういったものを持っていたんです。彼は、当時のギリシャ文化の最高のところを――あのキリキヤのタルソという所はアレキサンドリアとアテネと並んで、当時の三つの大文化都市の一つです。アンテオケも相当なんです、あの頃は。四つと言ってもいいくらいです――ギリシャ都市で彼はギリシャ的な教養も身につけてしまった。また、エルサレムに来てはもちろん、ガマリエルのもとで律法の世界の教養も身につけて、ヘブライとギリシャと両方を彼は兼ねそなえていた。いろんな素晴らしい最高水準なものを彼は持っていた。けれども、このキリストというひとにぶつかって、パウロはこれを、

「塵芥の如く思う」

とピリピ書で書いた。

「一切のものを私はマイナスに考える。ただイエス・キリストだけがプラスである。

キリストという義だけだ」

と。これも「キリストの義」なんていって、この「の」が何か部分的なものであったらダメですよ。キリストが義なんです。キリストが愛なんです。

そういうキリストにぶつかって、彼は全部そういうものは要らないと言う。無条件だと。「異なる福音」というのは、条件付き福音ということです。何か人間的な条件を付けて、律法という一つの条件をそこに付けてみたり、知識という条件を付けてみたり。何か修養、勤行、宗教的な祭儀、そんな条件を付けてみたり。

だから、「無教会」なんていう言い方は、歴史的には確かに重要な、内村先生は役割を果たしたわけです。

「いわゆる教会も要らん」

と。けれども、本当の意味にける教会を否定しているのではもちろんない。

絶対無条件の恵みのみです。「信仰のみ」という言葉はよく聞くけれども、

「恩恵のみ」

というのはあまり聞かない。「ソラ・フィデ」（信仰のみ）という言葉は聞くけれども、「ソラ・グラティア」（恩恵のみ）という方がむしろ本当なんです。具体的には、キリストが具体的な恵みなんですから、「グラティア」なんですから。「グナーデ」（恵み）なんですから。この「恵みのみ」の福音を伝えたのに、

「キリストだけでは足りないからとお前さんたちはやっているではないか。とんでもない」

というわけです。古い訳には、あとの方に「背きたる福音」なんていう言葉がありますが――原文は「背きたる福音」という表現ではありませんけれども――なかなかこれは面白いと思います。

●実言は実現する

8されど我等にもせよ、天よりの御使(みつかい)にもせよ、我らのかつて宣(の)べ伝えたる所に背(そむ)きたる福音を汝らに宣べ伝うる者あらば詛(のろ)わるべし。

と。それが天使であろうと何であろうとダメだと。パウロの確信は大したもんです。ということは、パウロは自分の信仰なんてものを確信をもって言っているのではない。キリストだけが彼の確信の事態でありますから。そこではっきりと言えるわけです。

私なんかも集会していて、時々、異なる福音の要素がガタガタ入ってきて、第二義的なことを問題にして、どうのこうのとやることが起きてくるわけですよね。また、集会のお互い同士の人間的なことで、どうのこうのと。ダメですよね。どうせ、人間は十人集まれば十人十色で、さまざまですよ。それをお互いに問題にし合ったら、収拾つきはしない。人間的なものを乗り越えて、自分自身にこそ本当にプロテストして、そして進んで行く。「プロテスタント」とは、我自らにプロテストする者をプロテスタントと言う。何もカトリックにプロテストするのが本当のプロテスタントでも何でもない。究極の意味においては、自分にプロテストする。

「己自身を憎まずば、わが弟子となることができない」

と、キリストが激しいことを言われた。誰かこの言葉に耐え得んやですよ。イエス・キリストの言葉は、水を割らずに仰るからね、条件なしに無条件に。

「自分自身を憎まずば弟子になることができない」

「神さまの如く全くならなければダメだ。父の全きが如く全かれよ」

なんて。この罪びとに向かって、キリストは手放しでもってひどい要求をなさる。

「イエス・キリストだから、そういうことを仰ったろうが。仕方がないから、まぁ、しかし、敬遠しておこう」

なんていうことではない。

イエス・キリストは決して空言は仰らない。実言を仰る。実言を仰るから、これは実現する。それは、キリストにさえ来れば、実現する。だから、どうか皆さんは、どんなに

「せよ、すべからず」

なんていう言葉があっても、決してそんなことで縛られてはいかん。

「必ず、させてやるぞ。そんなことはしないぞ」

という断言として響いてこなくてはいかん。それは、キリストという恵みを受けとれば、その角度になるんです、質的に。現実の我々は躓いたり転んだりだけれども、躓いても転んでもなお前進してやまないということは、このキリストという恵み――「恵み」といったって、これはもの凄い力ですから、義ですから、また愛ですからね、何と言ったって仕方がない――そういうものが私たちの中に入ってくれれば、恵みというキリストが入ってくれば、それは喜びです。

●生命の御霊の法

ルターがあとの方で言っている。

「律法は、本当に楽しみと愛とをもって律法を行うものでなければ、本当に律法を満たすことにはならない。それは生まれつきの我々には不可能である。」

と。そのことにルターは非常に苦しんだわけです。これが如何にして可能となるかという問題なんです。律法は聖なるものである。本当は律法は人を活かすものであったところが、逆に人を殺すことになったが、律法が悪いのではない。こっちが悪い。

人生、宇宙、すべてこれ法則ですよ。みな法則の世界、法の世界なんです。「法」という言葉が何か非常に縛るようだけれども。一切のことは、自然界もみな、これは法則です。今日は、風がちっともない。だから、木の葉がちっとも動かない。風があれば、木の葉は動く。これは物理法則の世界です。太陽が照っているから、少しまがぬけた蛍光灯なんか灯っているけれども、ちゃんと明るい。すべて法則の世界です。

陽の下でランプを持ってソクラテスは人がいるかと思って一生懸命で見ていたという有名な話がありますが。あまりに人間らしい人間がいないからと。本当に人間らしい人間は、神さまの法則にのっかった人なので、神さまの法則に乗っかった人がこのキリストであります。

私たちは、その神の法則に乗っかれば、本当にこれが楽になる。人を活かすはずの律法

をいわゆる縛る律法として受けとったのが、イスラエルの歴史なんです。縛る律法として受けとって、その律法に縛られて一生懸命でやっている。ご苦労さんな話です。ところが、イエス・キリストはそんな縛る律法に縛られないから、自由に行動されたが、実は本当の意味において律法を満たしているひとであった。そのことが分からないから、

「あの野郎は新興宗教だ」

というわけで、キリストは当時の学者や律法に詳しい人や祭司に嫌われて、敵視されて、とうとう十字架に掛けられるようなことになる。始めは民衆は、イエスが素晴らしい不思議なことをなさったりするものだから、病が癒されたりするものだから、「ワッショイ、ワッショイ」で喜んでいたけれども、ちょっとそういう学者や祭司や何かの煽動によって、みんな群衆はバラバの方をゆるして、キリストを十字架に掛けるようなことになってしまった。何とたわいもないことか。イエス・キリストは結局、本当の意味においては、誰も味方がいない。ペテロですらもキリストを否(いな)むというような事態になった。これはみな、本当の律法の世界に我々人間が入れないからです。

律法は実は、律法の根本は神の聖なる意志です。聖意です。だから、キリストは「律法」と言わないで、

「汝の意志を、御意(みこころ)を成させ給え」

と祈られた。律法というのは人間が考え得るようなものではない。神さまの御意というものは端倪(たんげい)すべからざるもの。それに乗っかっていくということはどのようにして可能であるかという問題です。

神の御意は即ち聖なる法ですから、聖法であります。聖意が即ち聖法である。「これこれというものが法則である」なんて決まったものではない。生きた法則です。活ける法則です。もう一ついえば、霊法ですから。

「生命(いのち)の御霊(みたま)の法(のり)」

と、パウロがローマ書8章で言っていることが即ちこれなんです。生命の御霊の法。活ける法であり、御霊の法である。

人間は「無条件」ということを言うと、かえって、

「そんなことでいいか？」

と言って、非常に何かそこに付け加えようとするけれども、そうではない。なぜ、その無条件に人間はなれないか。ま、少しあとにしましょう。

●キリストの顕示によった

パウロは、自分がどこからこういったキリスト・イエスの福音を受けたか。これは

「ただイエス・キリストの黙示に由るのである」

と言う。12節、

12 我は人より之を受けず、また教えられず、ただイエス・キリストの黙示(もくし)に由れるなり。

「イエス・キリストの黙示」というのは、もちろん「黙示」という言葉が少し困るけれども、イエス・キリストの顕(あらわ)なる示しによった。「顕示」と言った方がいいくらいだ。イエス・キリストの顕示によったということは、言うまでもなく、使徒行伝の9章、22章、26章に出ているパウロのあの回心の事態です。

パウロは悟りどころのさわぎではない。彼はもの凄い自信をもって、キリストとキリストの福音を信じている者に逆らっていたわけでしょ。そして、あのステパノが――彼はいわゆるヘレニスト・クリスチャンの第一人者ですから――捕らえられて、彼らに弁明したときに（使徒行伝7章）、ステパノがユダヤの歴史を説いてきて、終りの方で何と言ったかというと、

「お前たちは聖霊に逆らっている」

とはっきり言いました。要するに、律法の事態を私して、人間的な宗教にしてしまっている。律法宗教、祭儀宗教にしてしまっている。神の言、神の意志を本当に御霊をもって受けとる事態とは違うという意味で、彼はこの頑なな自己主張を――霊的な自己主張というのは一番困るんです、マルチン・ルターも言っておりますが――霊的な自己主張というやつを律法に従ってやっているから「パリサイ」です。これをパリサイ主義という。

カトリック、プロテスタントの歴史でも、キリスト教の歴史でも、宗教戦争というのがあるでしょ。宗教戦争というのは、自分の信仰箇条や信仰や、また在り方に対して非常な確信をもっている。そして、他を排撃する。そしてとうとう剣をとって、宗教戦争をやる。戦争しなくても、人を殺してみたり。その点でカルビンもちょっと間違ってしまったな。ルターのときも、農民戦争なんていうのが――これは少し角度は違いますけれども、社会的な問題もあって――起きて、ルターも困ったわけです。

そういったパリサイ的なものの彼はチャンピオンであったわけです。だから、ステパノが殉教の死をとげて、

「彼らは為すことを知らないから、赦してやってください」

と彼は祈りながら、石に撃たれて血まみれになって倒れながら、しかし、ステパノの霊はキリストのもとに凱歌をあげて凱旋して行った。パウロ（サウロ）はそれを見て、まだ悔改めない。いよいよいきり立って、ダマスコの方へ向かって、キリストを信ずる者を捕らえるという添え文をもらって、さらに進んで行くわけです。

ところが、ダマスコ城門外において、とうとう復活のキリストが現れて、

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか！」

ときた。私は第一の殉教のステパノの祈りが確かにその背後にかかっていたと思います。身を棄てて、この福音のために戦ったところの殉教者の祈りをキリストは聞かれた。

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか。ステパノを迫害したのは、私を迫害したのだぞ」

と。あの「我を」の中に、このステパノの殉教の死が隠されていると思います。

サウロはぶっ倒れてしまってどうにもならん。ものが言えず、耳が聞こえず、目が見えず。口が塞がってしまった。全くキリストの霊に霊縛されて撃たれてしまう。聖霊に逆らっているわけですよ。聖霊に逆らっている罪は赦されない。だから、聖霊に逆らって、

「汝らは聖霊に逆らう」

とステパノが言いましたその通りなことをパウロはやったわけです。

「聖霊に逆らう罪は赦されない」

というこの赦されざるところの罪をパウロは知らずに進んでいるわけだ。だから、恐ろしいですよ。とうとう審判がきた。あれは審判ですよ。パウロに対するところの審判。決定的な審判が臨んできた。そこで、彼は一遍、死の状態に落とされたわけです。

そして、アナニヤによって按手（あんしゅ）をされる。ちゃんとそれはもう御霊が示しているんだから、アナニヤに。

「こういう者が今に来るから、お前は按手してやれ」

と。また、

「お前はこういう所へ行け」

と、パウロにもちゃんと来ている。これは本当に霊界の不思議な消息です。その通りです。そして、アナニヤによって按手されて――それが本当の按手というんです。手を按（お）かれた。形式的な按手ではない――彼は目が醒めた。肉眼の目が醒めたのではない。心の目が醒めて、

「我が眼より鱗（うろこ）の如きもの落ちたり」

と言わざるを得ないのがそのことです。

●十字架の罪の贖い

驚天動地の事態に、青天の霹靂（へきれき）の事態に彼は遭って、本当に参ってしまったわけだ。この復活のキリストというものが彼の本当の立ち上がるところの根拠になっている。復活のキリストにぶつかった。彼はアラビヤに退いて、長いこと瞑想し祈ったわけです。そして、一体、十字架に掛かったキリストとは何者であるかと。パウロは旧約聖書をよく知って、よく学んでますから。そしてついに、

「ははぁ、これは羔羊（こひつじ）である」

と気がついた。

大祭司が一年に一回毎に至聖所と聖所の中に入って行って、民の罪の執成（とりな）しをやる。そして、生贄（いけにえ）を献げるという旧約の宗教。この祭儀宗教は、実はあれは型であった。それを全うしたのはキリストである。イザヤ書53章というものはちゃんと読めているわけです。

第二イザヤ、イザヤ書40章から55章が旧約聖書の最深最高のところですから。それはもうパウロは読んで知っているわけだけれども、今まではそいつが本当に読めてない。復活のキリストの光でもって読んでみたらば、この光に照らされたイザヤ書53章は十字架である。我らの罪のために彼は打たれて砕かれて、そして、彼は我らの罪を負ったのであると。初めて、イエスの十字架というものが、盗賊の十字架や単なる殉教的な十字架とは質が違う、絶対唯一のものであることに彼は気がついた。復活のキリストにでっくわして、逆にその光でもって十字架が見えてきたんだ、パウロという人は。

この十字架の罪の贖い。マルチン・ルターもその罪の自覚をしました。ルターの言葉の中にもあるんです。

「我そのものが罪である」

とルターも言っている。「この行い、かの思い」ではない。「この欲、かの欲」でもない。我そのものが、この自我そのものが「罪」であって、これはどうにもならん。もちろん、「罪」と言ったって、我々の人間の構造というものは複雑なものですから、善きものに対する認識もあります。また、善きことに対する願いも持っています。良心というような事態もあります。けれども、それらはすべて根底的に無力になっている。決定的勝利を得ないわけです。

それに対する楽観的な角度からは、ちょうどルターが出た頃に、いわゆる「自由意志論」なんていうエラスムスの人文主義が一面においてあった。始めはルターは人文主義の方に、ヒューマニズムの方にかなり味方をしていたわけです。彼は哲学者でもあったから。ルターは始めは哲学の講義もやっていた。あとから神学教授になった。エルスムスとは始めはそんなに仲は悪くなかった。人間の意志は、なるほど生まれつきの我々にもなかなか良いものがありますから、現実を正直に見て、決してそれ自体、頭から爪先まで悪いところばっかりでもないように見える。ところが、イザヤ書には、

「頭から爪先まで罪に満ちている」

なんて書いてある。そういう、生まれつきの我々を正直見て、悪くはないですよ、性善説もある意味においては成り立ちますよ。

けれども、もう一つ違った次元から見ると、それらはなるほどあるけれども、決定的にはダメだと。願いにすぎない。部分的にすぎない。決して本質的ではない。枝葉にすぎないということがだんだん分かってくる。それで、人間の自由意志なんてことは、道徳の世界では一面の真理ではあっても、実はそれが本当の決定的な力を持っていないというところにぶつかって、どうにもならんと言って本当に、

「我そのものが罪である」

と言ってぶっ倒れてしまうところに来るわけです。

嫌なんだね、こういうことを人は言われるのが。今の現代人なんていうのは、人間肯定

であり、人間主義であり、人間の自由主義であり、

「こんなことはもう昔の話で、こんな考えは成り立たない」

と思っている。今の青年は大体そうでしょ。そして、科学的な思惟ですべてが解決すると思っているが、とんでもない。

事実が証明するんですよ、論証よりも。事実証明です。どうにか本当になっているのなら、その通りやってごらんなさいと。けれども、それは何かにぶつかると、どうにもならないことになる。普通は壁が見えないものだから、壁がないと思っているけれども。霧で見えないものだから、歩いているうちに、そのうちにドスンと壁にぶつかる。そういう「壁」という言葉もカフカの中にもあるけれども。壁にぶつかってしまう。

実は、四方八方が壁ですよ。壁が見えないだけで、大いに自由のような気持でいるけれども、壁に囲まれている。ただ、上は開いてますよ。上へ飛躍すればいい。何によって飛躍するか。飛べませんよ、生まれつきの人間には羽がないから。これは本当は飛ばなくてはいかん。飛躍すれば、こんな壁は乗り越えてしまう。もう本当に自由の世界になる。この飛躍せしめるところのもの――この壁を本当の意味においては、突破させるんですけれども――突破させ、そして飛躍させるところのものは、壁をぶち破るものは何か。

●全身的なひっくり返り

パウロは、そういった意味において、復活のキリストの顕示、顕わなる示しによって、彼自身が全身的にひっくり返された。全存在的に、全身的にひっくり返された。パウロは、「分かった」とか、「悟った」とか、そんなことではなくて、全存在的に彼はキリストにつかまれてしまった。

言葉は、皆さんが聖書を読んだり、あるいはこうやって私みたいなやつが話をして、お聞きになるときに、心や頭で受けとっていたら、いつまでたっても始まらん。魂のどん底においてこれを受けとっていかなくては。また、私がもし頭からしゃべっていたら、それはそう響かない。魂のどん底から告白しているのでなければ、それは響かない。だから、申し上げているとおり、

「私は、お説教はしてません」

と言う。私は語りながら、いつもこの世界を自分で突破して、常に新たに突破させられていくだけの話です。

「私はもう既に突破しましたから、皆さんに教えます」

なんて、そんなことを言っているのではない。「これでいい」なんていうところはないんですから。限りなくキリストに捕まれ、限りなくキリストに迫って行く。福音というのは、それ自身が満たされながら展開して行くところの我々の事態なんです。

だから私は、

「集会には来なさいよ」

と言う。

「どうも、今日は調子が悪いから、集会はよしておこう。まだ、自分の中には問題があって、もう少しこれが片づいてから行こう」

なんて。そんなのがよくいる。もう何年も来ているくせに、まだそんなことを言っているのがある。もう嫌になってしまうよね。調子が悪いからこそ、行き詰まっているからこそ、もはや問題なしに来なければダメです。私がもし何かお説教しているのなら、来なくていい。けれども、常に新たにこの世界に――太陽の光は今日は素晴らしいけれども、しかしそれよりも素晴らしいキリストの光に――接するために私たちは来ているんです。

「集会には来なさいよ」

というのはそのことです。集会はちょうど沙漠のオアシスみたいなもので、そこで本当に水を飲み木の実を食らって、そして次の沙漠の旅を続けて行こうというのに、このオアシスに来ないで、途中で思案していたら、お腹がすいてしまったり、おかしなことになってしまいますよ。皆さんも、京都の集会がそういうオアシスであるからこそ、次の一週間の旅路の原動力をそこに汲んで――お互いに、聞くも語るも同じことです――行こうということだと思う。

そうであるなら、もう絶対に大丈夫です。私たちは、この御言において――ただ御言を学ぶのではない――真に御言を食らうことでなくては。

「わが言は霊なり、生命なり」

とキリストが仰るとおり、文句なしにそうですから。そういうようにして、聖書は――もちろん日曜にだけ聖書を読むのではない――毎日いずこにおいても、たとえ新聞は読まなくても、聖書は読まないではいられないというようなことです。私の聖書は三つに破れてしまっている。聖書というのがもう文字ではない。身体の一部分であります。

●御声と御霊は一つ

16 御子(みこ)をわが内に顕(あらわ)して其の福音を異邦人に宣べ伝えしむるを可(よ)しとし給える時、

パウロはそのようにして、「御子をわがうちに顕して」ということが、このダマスコ途上におけるところの事態です。キリストの光に撃たれたことが、ただ外側からではなかった。本当に内側までキリストの、

「何ぞ、我を迫害するか！」

という声は魂のどん底に響いてきて、撃たれてしまった。

「参った！」

と。この光は全身を貫いたから、彼はぶっ倒れてしまった。立ってなんかいられない。こ

れがこのキリストの御霊の事態。御声と御霊は一つなんです。ルターが別なところで言っている。

「どんなに聖書が素晴らしい書かれた文字であっても、これを書かれた文字として読んでいるうちはダメだ。これは今――書かれたではなくて――語られた声としてこれを受けとるまでは、本当に聖書を読んでいることにはならない」

と。現実です。だから、聖書なんていうものは、これは暗号にすぎない。聖書の解釈だとか何とか言って、一生懸命で文字の詮索ばかりやっている。いくら詮索して、どんなに歴史的な真実に近寄っていって、いわゆる歴史的な真実が見つかったってダメですよ。本当の神の歴史的な真実というものはそんなものではない。

そこにおいて、破れた言葉の奥に本当の声が――「奥に」ということは、それが「直ちに」なんですけれども、現象は直ちになんですけれども、ま、言葉のあやとして「奥に」と言いますが――その書かれた文字が直ちに声として、現実として、私たちに読まれるためには、いかにしてそれが可能であるかという問題が残る。

「読まれなければならない」

と言っただけでは、どうにもならん。

「はい、そうですか。では、どうしたらいいんですか」

ということになる。それは如何にして可能であるかという問題にくるわけです。

パウロは具体的にこのキリストにぶつかって初めて、彼の中にイエスの十字架というものがやがて本当に受けとられてきた。そして、復活のキリストの生命が入ってきた。そして今度は、旧約聖書というものが、いわゆる今までの読み方とはまるっきり違ってしまった。今でもユダヤ人が読んでいるような読み方ではなくなってしまった。

マルチン・ルターが全くそうなんです。ルターは「神」というときに、もう直ちにそこに「キリスト」を読んでいる。旧約においても、ルターの聖書解釈を見ていると。

「アブラハムよりも先に在りしなり」

というキリストはもう旧約・新約をずっと貫いている。

●同円異中心

２章では、ペテロと自分とを比較して、ペテロは割礼ある者に対する使徒であり、自分は異邦人に対する使徒であって、しかも、ペテロが割礼ある者に対する使徒としても、あるまじき福音に反することをしたから、自分は面とむかってペテロと争ったということがいろいろ書いてあるわけです。

エルサレムの元始キリスト教団というものは、中心はペテロとヤコブとヨハネです。ヤコブは主の兄弟であるヤコブ。その三人が三本柱。彼らはもちろんキリストの福音を受けている。なかなかそれはよく受けているんだけれども、やはり、律法は棄てない。律法を

守ることと、祭儀もまた――その意味において祭儀が律法の中に入りますが――祭儀を行うことも彼らの在り方の中には肯定されている。

ところが、パウロは急進派ですから、それをやっていたら、せっかくのキリストがキリストでなくなってしまうと言う。だから、その当時にしたら、パウロは孤立無縁です。今でこそ、「パウロ、パウロ」なんて言うけれども、本当にパウロという人は孤軍奮闘したわけです。始めは、バルナバなんていう少し先輩とも一緒だったけれども、バルナバとも別れるようなことになり――ルカとマルコが付いてはいましたけれども――彼は結局、独りで立たしめられていた。

一体、預言者というものはみんなそうです。アモスにしろ、ホセア、イザヤ、エレミヤ、みんなこれは群居していなかった。彼らはみな神の召命を受けて、独りで立っていた。それは仲間は幾人かいるかはしれないが、その立ち方は本当に神と独りである。こういう荊棘（けいきょく）の路を、道を拓（ひら）く人たちは歩ましめられる。仕方がない。けれども、それは孤のための孤ではもちろんない。本当の共同体というものは、そこに自然に神さまは形成していらっしゃいますけれども。

皆さん一人びとりもそうですよ。これだけの集会を持っていらっしゃる。けれども、集会の一人びとりは神さまの前には本当に個として立つ。個が決して孤独という意味ではなくて、「神―キリスト―我」という――これが本当のプロテスタントの言い方です――一人びとりが個としてありながら、全体を担っているという自覚に立たなくては。集会の指導者という者はもちろん置かれて結構です。けれども、一人びとりは本当に全体を担っている。

同円異中心という。中心はみな違うけれども、円は同じである。一人びとりが神との関係においてはこの中心に立っている。相対的な意味においては、中心となる人があるでしょうけれども、一人びとりはそういうように立っている。これが万人祭司主義のプロテスタントの、いや福音の在り方なんです。

でも、仕方がない。パウロはどうしてもこの場合に、全世界を向こうに回して立たされている。ただ独り十字架に掛かった神の子キリストが、

「我と共に十字架を負え」

というのは、みなそのような具合にして、みな独りで立たされている。けれども、それは寂しくはない。それがなぜ寂しくないかはあとから言います。

●真理のもつ極限性

皆さん、真理というものは極限性を持っているんです。この極限性の、本当に自分で極に立っていなければ、本当の力は来ないんですよ、中間では。極性を持ってないと。そうでないと、人生のいろんなことにでっくわして、本当の最後的な決定的な勝利がこないんです、その極性に立ってないと。たとえ、集会の人がみんな私を棄てましても、私を離れましても、

私は独りで行くと。それだけの確信がなければ、本当の勝利はこない。また、それだけの確信が、本当の勝利をあらしめるところの所以（ゆえん）である。

しかし、その確信は、いわゆる主観的な確信では絶対にない。私自身のそんな主観的な確信なんかひとつもない。けれども、たとえ今示されつつあるところのこの福音の真理を言うために、どんなに人に棄てられても、もう自分は仕方がない。やむをえない。パウロが、

「私は神を喜ばせているか、人を喜ばせているか」

と、ガラテヤ書の始めの方に書いているでしょ。

10 我いま人に喜ばれんとするか、或は神に喜ばれんとするか、そもそもまた人を喜ばせんことを求むるか。もし我なお人を喜ばせおらば、キリストの僕（しもべ）にあらじ。

と書いてある。イエスは、

「わが名の故に、福音のために、すべての人にお前たちは憎まれるぞ。終りまで耐え忍ぶ者は救われるぞ」

とも言っておられる。ずいぶん激しいことを仰るですよね。

「では、『すべての人に憎まれん』なら、お互いの間が憎しみになってしまうではないか」

なんて、そういった論理ではないですよ、ああいう言葉は。

「すべての人に憎まれるということがたとえあっても、大丈夫だぞ」

ということです。現実には、すべての人に憎まれるなんていうことは、数学的にはない。けれども、

「たとえそういったことがあろうともという極限に立ってごらん。そうしたら逆に、本当に人を愛していくことができるし、また人に本当の意味においては慕われていくことになる」

と。そこは言わないです、そんな答案は、キリストは。

私たちは、その点では最悪主義なんです。ところが、最悪主義は、逆に最善主義なんです。最悪の場に自分を立たせているときに、どん底に立っている人が実は一切を担うことのできる所に在る。どん底に立つことができるためには、キリストがくれば、立つことができ、そして一切を包摂することになる。一切を包摂するようなものになっていくんです。

●十字架の下でお互いに赦し合う

２章のそのゴタゴタのところは、別にそんなに私たちはここで考えることはなかろうと思う。けれども、現実にはいろいろなことが起きてきますが、しかし、どこまでも、我々はキリストという福音、第一義に生きてください。

具体的に集会をしていると、いろいろな問題があります。課題があります。大いにそれ

は考えてよろしい。話し合いをしてよろしい。けれども、話し合いや考えや遣り方で解決すると思ったら間違いですよ。人生の社会問題でもみんなそうです。ある割り切れない大事な要素を抜きにして、第二義的なことで一生懸命で解決しようというのが、いわゆる社会主義的な考えなんだろうと思いますけれども。人間の大事な見えない要素、見えない構造に対して目をふさいでいる。それがまた科学的思惟の行き方なんです。

第一義というものをちゃんと置いていれば、その第二義的なことが未解決で――決して解決しやしないんです。未解決のままで、もちろん、それをいい加減にしろと言うんじゃないけれども――そこに動揺的なものがあっても、この第一義がしっかり立っている所には必ずすべてのことが本当によく進ましめられていく。そういう意味において、お互いに本当の平安があるし、お互いに本当に信じていくことができる。現実はお互いさま、いろいろな性格があったり、考え方があってゴチャゴチャな面もあっても、その先をいつもお互いに第一義において信じていくときには、それが成る。

無教会の歴史でも、なかなかみんな一言居士がたくさんいるよな。内村先生とその第二番目の先生方も――私の先生の藤井武先生だって、ある一つの問題で内村先生と、喧嘩でもないけれども――もの別れになってしまうようなこともあった。けれども、十字架が無教会では立っていた。十字架の下でお互いに赦し合おうという。この十字架が立っているから、無教会はとにかく進んでいるんです。けれども、もっと積極的な意味で、もっと明るい意味で、もっと祝福された意味で――自分が無教会出身だから、すぐ「無教会」のことを言ってすみませんが――明るくなっていかなくては。もう、元始キリスト教会においても既に問題は起きている。パウロのコリント教会だって既に問題が起きて仕方がないから、パウロはコリント前書を書いたんだ。

その十字架は結構だけれども、これがどうしてもある一つの観念の方に少しズレていく傾向があるとするならば、十字架が観念でなくて、十字架が本当にパウロが言うような意味において十字架であるためには、もう一つ別なものが入って来なくてはならない。

●天国の鍵

これが私たちがこのガラテヤ書2章の終りの方で受けとらなければならない事態です。これはパウロが告白している書簡の中で一番大事なところの一つです。そこが即ち、

9 我は神に生きんために、律法によりて律法に死にたり。20 我れキリストと偕(とも)に十字架せられたり。最早(もはや)われ生くるにあらず、キリスト我が内にありて生き給うなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり。21 我は神の恩恵(めぐみ)を空しくせず、もし義とせらるること律法に由らば、キリストの死に給えるは徒然(いたずら)なり。

「私は神に生きんために、律法によりて律法に死んだ。私はキリストと偕に十字架

せられてしまった。もう自分は生きているのではない。われ生く、されど我にあらず。キリストが私の内にありて生きておられるのである。今私が普通の肉体に在って生きているのは、私を愛して私ために己が身を捨て給いし神の子を信ずるに由って生くるのである。私は神の恩恵たるキリストを空しくしない。もし義とせらるること律法に由らば、キリストの死に給えるは徒然（いたずら）である」

と。もうこの中に福音の一番大事なことが集約されて告白されているわけです。私たちは一生涯、パウロのこの句において――これでいいということはない――限りなくこの聖句を自分の身に体していくことによって限りなく展開していく。そういう天国の鍵の如き文字です。もはや文字でも何でもない。

「私は神に生きようと思った。神さまにおいて生きようと思うんだけれども、私を神に生きさせるための律法によって、逆に私は死んでしまった。律法は私を殺そうとしたわけではないけれども、律法によって死んでしまった」

と。ローマ書でパウロが言っていたところの聖なる律法――律法は活かそうとしているんだけれども――その聖なる律法の前に、聖法の前に、これを踏み行えない罪なる我というものがあって、どうにもならん。逆に、これによって殺されてしまう。ところが、それが分からないで、律法をいわゆる律法として守っていると思っていたが――パウロがいわゆる「律法の義」と言っているやつ。律法を一応守っている、ユダヤ教的な律法の守り方が即ち「律法の義」というやつなんだ――それによっては救われることがないと、パウロが自分の体験から言っているわけです。キリストに撃たれて初めて分かったんだから。

実は、律法の事態を私していた。本当に律法に従っているのならば、人を憎むこともなければ、パリサイ的に人を見下すこともないはずなのに。律法の立派なパリサイ的なものが逆に人を見下して、

「あれはいわゆる土の民である」

なんてやっている。それをパウロが自分でやってきた。だから、もうよく分かっている。外側から守ることは、やはりルターも経験した。それでルターもぶっ倒れてしまったわけです。

「神の前にいかにして義たるか」

という問題がダメだった。「神の前にいかにして義たるか」なんていう問題は今の人には、

「なんだ、それは昔物語か」

としか見えないね。考えられない。

「そんなバカくさい七面倒くさい、何かバカに真面目そうなことは今は通用しない」

なんてね。

●喜びをもって従う

「義」という字は、申し上げているとおり、「羊の我」と書きます。本当に羊の如き我となって、神の聖なる御言に従順に従って受けている。それがキリストの姿ですから、キリストは「羔羊（こひつじ）」と言われる。けれども、その従順とか、服従とかいう言葉はややもすると、本当の福音の角度からはズレる。それはルターが言うところのいわゆる修道院的敬虔というやつです。自分をただ律法的に殺しているというようなことではなくして、従うということが本当に信頼をもって、喜びをもって従うのでなければ、本当の「従う」ではないわけなんだ。

『パラダイス・ロスト』（楽園喪失）の始めの方にミルトンは「ディスオビーディエンス」（不従順）という言葉を使っている。それはそれでいいんだけれども、本当に喜びをもって従っていくこと。もう従わないではいられないという従い方が本当の「従い」なんだ。その本当に従わないでいられないという気持は、人間の中になかなか起きてこないというわけです。それは瞬間的に起きるし、部分的には起きるでしょう。けれども、決定的にはそれが起きてこない。

人間は神さまの御姿につくられているんですからね、本来、質はあるんですよ。質まで全然なくて、

「全然サタンの子だ」

なんて、そんなことは現実には合わないですよね。信仰がちっともない人だって、本当に素晴らしい魂だと思うような人があるじゃないですか、世の中に。私はそういうことに対して目をつぶってはいかんと思う。

けれども、本当に喜びをもって神さまに従うという決定的なことがない。ここに我々が失われた存在であるゆえんがある。単なる取り澄ましたような従順ではない。それはいわゆる道徳であっても。

ルターの宗教から出発したところの、カントの道徳によれば――ま、カントはちょっとそれでもまだひとつの限界をもっていますけれども、道徳の世界だから仕方がない――

「本当の喜びをもって、義務を義務として道徳律に畏敬の念をもって従うところに、そして、自らそれを本当に義務と感ずるところに道徳がある」

とカントが言いました。それは道徳の一面の大事な性格でありますけれども。それでシラーが、

「なぜ、そんなに義務だとか、畏敬だとか言うか。もっと喜びというものがあって いいのではないか」

というようなことを皮肉って言った言葉がある。それは、シラーの方がむしろ福音的な角度からものを言っている。ところが、その喜びというものが、ヘタすると、自己満足的な幸福主義に陥るものだから、カントはそれに対して、

「幸福主義的なご利益的な角度はいかん」

と言っているのが、カントの道徳の峻厳なまた大事な面なんです。

また、ルターがカトリックの幸福主義に対して、良心宗教をもって言ったのも――自分の何かいわゆる楽しみというようなことではダメだと――その点では、アウグスティヌスの宗教に対して、ルターがある一つの批判をしたのはそのことなんです。ここのところは微妙な問題で、いわゆるサイコロジカル（心理学的）にそんなことを分析することはありませんけれども。

喜びというものは、本当に自己が贖われて、贖いを本当に徹底的に受けてきて、そして、キリストの生命に、キリストという愛に本当に自分が浸ったときに、そこにおのずから生じてくるところの喜びは第二の天性です。人間であるかぎり、人間のいろんな感情というものは――「感情を殺せ」なんて言ったって、殺せるものではないですよ――それが一遍、本当に否定されたときに、それが変質してくるわけです。変質です。同じ「喜び」という言葉を使っても、幸福主義的な喜びか、本当に神に栄光を帰しているところの喜びかは、質が違ってくる。そういった意味における、天的なものに変質したところの第二の人間性というものは、これは福音の世界では決して否定されてはいない。それは単なる悟りでもなければ、煩悩を去るとか何とかいうことではなくて、本当に人を喜ばせていくところの喜びです。人を喜ばせていくような喜びを持っている。

今、「喜び」のことをなぜ言ったかというと、律法は喜びをもって満たされないから、ついこういうことにまでなってしまった。喜びをもって律法は満たされないものだから、律法の前にどうにもならないから、律法で殺されたという。一遍、殺されることは大事なんです。律法で殺されるということはどういうことかというと、これは十字架にぶつからなければ分からない。

●キリストと共に十字架される霊的現実

私たちは、神の聖なる律法を、神の聖なる活ける霊の律法を本当に身をもって行じた人を十字架に掛けたではないですか。ということは、私たちはこの法則によって逆に殺されている姿なんです。全く逆説的に。だから、その審判は、律法に逆らったところのその罪の審判が実は、十字架において表れている。これがローマ書3章に書いてあるところの

「神は自ら義たらんがために

ということなんです。義たらんがために、キリストを十字架せしめた。そしてまた、その十字架によって、

「汝らを義とするためである」

という。「神が自ら義とならんがため」というのは、その律法に反していることを審判して、そいつを一回徹底的な死にもたらせる。

「罪の価は死なり」

という。完全に否定されてしまう。それによって私たちに直接に審判がきたら、みんなダメですよ。イエス・キリストの十字架において完全に私たちは処分されてしまっているんですから。パウロはそれをキリストの十字架で受けとった。

「もう自分はキリストと共に十字架された」

と。「思われていた」のではダメですよ。もうこれは説明の世界ではない。これは、そこが祈りなんです。考えられ、ただ頭で判断されて、「そうですか」という世界ではない。どこまでも、この事実に、これを全く霊的な事実として、霊的な現実として――ご飯を食べることが肉体的現実です。しかし、魂がそのようにキリストと共に十字架されることは霊的な現実です――その霊的な現実を自分が受けとるためには、ただ考えられていたってダメ。そのイエス・キリストという、十字架のキリストという具体的なものに、今現に私たちが接するという場は、祈りの場なんです。

その事実に接することが、そういった現（うつつ）の世界が祈りなんですよ。そしてまた、そういった現の世界で見ることが祈りであり、聞くことが祈りなんです。私はちょっと妙なことを言うけれども。この聖書を読むでしょ。聖書を読むときに、これを本当に今、神さまが語っている言葉として、今こちらに語られている言葉として読むときに、それは既に祈りの場なんです。祈りとは何でもないですよ。皆さん、こうやって会話するでしょ。神さまとの会話の世界、これは祈りではないですか。我々が会話しているのを、神との次元において持ってくれれば、これは祈りの世界なんだ。

我々はこうやっていろんなものを見ている。これを魂の世界で見ている世界がやはり祈りの場なんです。何か私は神秘的体験を言っているんじゃないよ。そういったような霊的な現実においてこそ、信という信仰の世界は、この霊的な現実において受けとる世界なんです。信ずるとは、頭で

「仕方がない、分からないから信じておこう」

なんてのは本当の信仰ではない。そうした霊的現実において見、また聞くという、そういったところで受けとっていくことが本当の信なんです。

自分は二千年まえのキリストと共に今、現に十字架されました。十字架は私に対する事実をもって語る言葉――「十字架の言」というのはそのことです――十字架そのものが言葉なんです。最も激しい言葉なんです。最も激しい事実、現実が実は最も激しい言葉である。その点で言と行がまた一つである。

キリストは十字架の上で七つの言葉を語られました。しかし、あれが十字架の言ではない。もちろん、あれも十字架の言でしょうけれども。十字架という言。いや実に、

「アブラハムよりも先にありしなり」

という、あの永遠のキリストが即ち、

「初めに言あり」

という「言」である。「ロゴス」という表現で言っているけれども。

そういうことで、発せられている言の奥に実は根源の言がきているわけです。

●自分の中に生きていらっしゃる活けるキリスト

だから、

「もはや、自分は生きていない」

と。本当に受けとってごらんなさいよ。

「自分は生きていませんからね。相変わらず、自分は生きていますよ。生きていますけれども、もうそんなものは問題でない」

ということが、「生きていない」ということです。

「私が今、相対的な自分がどうであるこうである、そんなものはもはや問題ではありません」

というのが、

「もはやわれ生くるに非ず」

という言葉なんです。十字架されてしまって、もう

「自分の信仰がどうだ、行為がどうだ、やれ考えがどうだ」

なんていうようなことはみんなどこかへ行ってしまった。生くるも死ぬるも、そんなものはもはや問題でないというのが、「もはや生くるに非ず」という決定的な告白であります。だから、十字架されてしまったから、生きていない。

「キリストが私のうちに生きている」

とは、相変わらず従来の私も生きていますよ。従来のパウロも生きてますよ。けれども、そんなものが生きているというよりも大事なのは、自分の中に生きていらっしゃるこの活けるキリストである。復活されて霊界に今、霊的な存在として在り給うところのキリストは一人です。けれども、

「私の中でキリストが生きている」

とはどういうことですか。これは御霊のキリストのほかにない。これが信仰の神秘といえば神秘ですよ。「神秘」なんていう言葉は使いたくないけれども。

こういうものを受けとる場が即ち祈りの場なんです。思われている、判断されている場ではない。キリストが私の中で生きていらっしゃる。こんな土の器でダメのカスの中にキリストは生きてくださる。罪びとなればこそ来てくださる。

「病める者は医者を要す」

という。キリストという医者が要るんです。病んでいないと思っていたらとんでもない。パウロは自分は病んでいないと思って、

「律法の義につきては責むべきところなし」

なんて公言できるようなパウロだったが、それは実は、健康であると思っている大きな病人であったんだ、彼は。

癌が今、一番病の中で問題だという。肉体の癌が問題で、こいつがなかなか排除できないというのは面白いことですね。私たちの霊的存在としての人間の中の癌というやつは罪――自我というやつが癌――この癌を手術してしまったのがキリストなんだ。癌は、どこでキリストは手術したかというと、この十字架で手術してしまった。決定的な手術です。私は、この霊的な自我という癌が本当に抜けてしまった人はおそらく肉体的な癌もずいぶん罹（かか）らなくなってしまうのではないかと思いますよ。癌というやつは、いろんな原因があるでしょうから分かりませんけれども、その中の或る非常に大きなしょうがない原因というものが除かれて、霊的に癌の取られた人は大いに、いわゆる肉体的な癌からも救われるのではないかと私は思います。しこりですからね、この癌というのは。肉体的な何かしこりでしょ、何かよく知らんけれども。そういうようなしこりが魂の中になくなってしまう。

●キリストは不死の霊、人を活かす霊

十字架されて――十字架されっぱなしではダメですよ、されっぱなしでは――イエス・キリストも十字架されっぱなしだったら、これはキリスト教なんてものはありはしない。キリストの教えが、「山上の垂訓」がどんなに素晴らしくたって、キリストが十字架されっぱなしだったら、どうにもならん。山上の垂訓の素晴らしさ、キリストの言葉がなぜ私たちに素晴らしくなってくるかということは、この言葉を活かしめているところのものがあるからです。

「わが言（ことば）は霊なり」

と言わしめているところのものがある。「わが言は霊なり」と言うときに、キリストは本当に永生を持っているところの永遠の霊である。死なざるところの不死の霊である。人を活かす霊である。人に活力を与え、活かす霊、生命を与えるところの霊である。

イエス・キリストは、私の自我という癌が取れたらば、抜けたらば、ここに本当に生命を与えてくださいました。

「イエス・キリストわがうちに在りて生くるなり」

というのはもう聖霊の事態です。だから、「十字架と聖霊」とは絶対に離してはダメです。

御霊のことを強調すれば、

「あれは聖霊派だ」

なんて言う。聖霊派もヘッタクレもない。そんなことを言うのは、本当に聖霊の事態が分からないから、「聖霊派だ」なんて言う。私は聖霊派でも何でもない。私はこのパウロ派であり、福音派であり、キリスト派である。

皆さんも、そういったイエス・キリストの御霊をいくら強調しても、その背後にはちゃんと十字架がある。十字架をいくら強調しても、その背後から光ってくるものは聖霊の光である。聖霊の流れである。もう絶対に、十字架と言おうが、聖霊と言おうが、ピタリ一つである。それは復活のキリストがそのことを事実をもって顕している。この三相（十字架・復活・聖霊）が一貫していると申し上げている。三位一体（さんみ）という言葉があるけれども、この三相が一貫して離すことができないと申し上げているのはそのわけであります。

「今、われ肉体に在って生くるのは私をこんなにも愛しているキリストによる」

と。この罪びとを――私がどうだから愛するのではない――このどうにもならない者を愛惜して、愛し惜しんでいる。皆さん一人びとりは本当に愛惜されている。誰に愛惜されなくても、キリストに愛惜されている。

●自分をキリストの中に棄てる

「わがためにおのが身を棄て給いし」

という言葉があるね。「棄て給いし」という言葉がどうも躓きになる。

「わがためにおのが身を与え給いし」

でいいんです。キリストはどこに棄てたんですか。イエス・キリストは、なるほど十字架上に棄てたかもしれないけれども、実は本当の復活の生命を私たちに与えてくださる。私たちは自分をどこに棄てるかというと、キリストの中に棄てるんです。あるがままの自分を、始末がつかない自分を――

「もう少し整えてからキリストのところへ行きましょう」

ではない――もうあるがままの自分をキリストの中に棄てる。

あのマルコ伝10章のところで、イエスのところへ走り寄ってきた富める青年に、

「お前はモーセの十誡をよく守ってきた。感心だね。ただ一つ欠けている。その持ち物をみんな棄てなさい。そして私について来なさい」

と言われた。ルターが、

「自分をキリストの中に投げかけ、棄てられてあるということが信仰である」

というようなことを言っているところがある。キリストの中に棄てられて、投げかけられてある。これが信であると。だから、信ずるとはいつも自分を投ずることであり、相手を受けとることである。向こうからの働きでいえば、受けとることが信であり、こちらからいえば、自分を投じ入れること、投入することが信なんです。どうか、この信仰という言葉を、ただ仰いでばっかりいないで、もっと具体的に存在的にしていただきたい。

もう、言葉が非常に躓きになっている。その観念の枠の中にみんな閉じ込められて、そして、なんのかんのとやっている。それでは始末がつかない。もっと大胆に受けとる。私は新約聖書をもっと大胆に、いつか暇になったら、大胆な訳をしてやりたいと思っているくらい

です。それは訳が訳でなくなってしまうかもしれないけれども、御霊の光でそこを読めば、それははっきり示されてくるわけです。言葉の本当の奥義は、

「パウロがこう言っているのは実は今の言葉でいえば、こう言いたいところだ」

ということが分かってくるわけです。

20我れキリストと偕(とも)に十字架せられたり。最早(もはや)われ生くるにあらず、キリスト我が内にありて生き給うなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり。

「おのが身を与えてくださった神の子を受けとるによって生きているのである」

と。「信ずるによって」なんて言わないで、神さまの子を、キリストを受けとることによって生きています。

「キリストは十字架に掛かって贖罪してくださった」

という命題を信じているのではありません。それを受けとることによって生きている。

21我は神の恩恵(めぐみ)を空しくせず、もし義とせらるること律法(おきて)に由らば、キリストの死に給えるは徒然(いたずら)なり。

「私は神の恵みであるところのキリストを空しくいたしません。もし、義とせられることが律法に由るならば、キリストの十字架の死というものは全く徒然(いたずら)なことになります」

と。

●御言と現象

ルターの『ガラテヤ書の註解』を見ても――そんなのを一々やっていたら大変だから、やめますけれども――ルターの響きが昔読んだときと違ってきた。しかし、ルターももう少し大胆に言ってもらってもいいなと時々思いますけれども。言葉の方にすこし重点がかかっているように思います。ルターは或るところで、

「昔は使徒たちは直接的な啓示でもって、そして非常な霊的な現象にでっくわしたが、今はそんな必要はない。もう聖書があるんだから。言葉によるんだ」

と言っている。それは一応それでいい。決してその現象を追ってはいけないから、それはいいんですけれども。今現に、我々が現象に対して何かおびえたり、或いはそれを制限したりする必要はないので、今でもいかなる現象も、もちろん二千年前と同じように起き得る。ルターのものを読んでいると、そこに或るひとつのブレーキがちょっとかかっているような気持がします。

「いかに聖霊を言葉と共に受けなくてはならないか」

ということを、彼はまた言っている面がありますから、それはそれでいいけれども。

また、人間の宗教体験の中には、時によっては現象も起きてくる。それはどこまでも、

この聖書の御言によってはっきりとそれが裏付けられていかなければならないことは、これは真理であります。それが、御言の裏付けなしにして、現象だけを追ったら、いわゆる直接啓示になったら、それはいかん。聖書によって啓示の世界はもうはっきりとしているんですから。そこで、ルターは、

「御言をしっかり正しく受けとれ」

ということにおいては、もちろん彼の言うことは正しい。正しいんですけれども、それをむしろ、そのあとの人たちが、御言の方に重点を置いてしまって、そして、せっかくの聖霊の面が非常に今のプロテスタントはうすくなってしまったところに、これが儀文化し観念化してしまった面がある。

パウロは驚くべき現象も体験しているけれども、しかし、パウロの書簡を見ると、決して現象を強調してはいない。そこは自由に御言を生かしているし、現象の面も本質の面から受けとっている。パウロの健全な構造を――むしろ、ルターなんかを媒介にしなくたっていいから――いきなり、この聖書にぶつかって、そして、パウロにぶつかり、あるいはヨハネにぶつかり、あるいはペテロにぶつかり、ヤコブにぶつかり、つかんで行くことです。

ルターは、「ヤコブとパウロがまるで反対」なことを言ったけれども、それは違う。ヤコブ書とガラテヤ書が実は本質においては一つのことを言っている。或る一つの表現の面で片一方が信仰を強調し、片一方は行為を強調しているから、まるで別なことを言っているようだけれども。歴史的な研究からいえば、ヤコブに多少、行為に重点がかかっていると言えないことはないかもしれませんけれども。しかし、本質においては一つであるということがはっきりと、聖霊の側からはつかめるんです。聖霊がなかったら、つかめないですよ。

ペテロにしろ、ヨハネにしろ、ヤコブにしろ、みんなこれは聖霊から発している言葉ですからね。表現は違ったって、みな一貫しているものがある。だから、

「霊は一つにして、賜物（たまもの）はさまざまだ」

とパウロが言っているとおりなんだ。この根拠の、聖霊という一番の根拠を忘れたら、もうすべて混乱してしまう。そして、一生懸命で現象で何とかして辻褄を合わせようと思ってやったって、それはダメですよ。ところが、ここ（根拠、聖霊）をつかんでいたら、この黄色も赤も白も青（現象、賜物）もみんなよく分かるんです。よく掴（つか）める。

「十字架と聖霊と復活」のキリストのこの事態が、今、2章の終りの二、三句でもってはっきりと私たちが身につけて、これが全部いかにして可能であるかということは、御霊を受けとったその現実が即ち祈りの現実である。本当の祈りはどこまでも御霊のもとにおいてのみ展開していくものであるということで、ひとつのくくりになったと思います。

では、そこまでとします。